

司 式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏 楽 大日南苗香姉

開 会 招 詞 詩篇100：1-5

* 賛 美 歌 2：1 (ソングシート)

1. 主のみいつとみさかえとを こえのかぎりたたえて、またき愛とひくきころ 御座にそなえひれふす。 アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 30：1

1. いともとうとき主はくだりて血のあがないもて民をすくいきよき住居をつくりたててそのいしづえとなりたまえり。 アーメン

公 同 の 祈 禱 5 使 徒 信 条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマ

リアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを^く受け、十字架^{じゅうじか}につけられ、死^しにて葬^{ほうむ}られ、よみに^{くだ}降り、三日^{みっかめ}目に死人^{しにん}のうちよりよみがえり、天^{てん}に昇^{のぼ}り、全能^{ぜんのう}の父^{ちち}なる神^{かみ}の右^{みぎ}に座^ざしたまえり。かしこより来^きたりて、生^いける者^{もの}と死^しねる者^{もの}とを審^{さば}きたまわん。われは聖^{せい}霊^{れい}を信^{しん}ず。聖^{せい}なる公^{こう}同^{どう}の教^{きょう}会^{かい}、聖^{せい}徒^とのまじわり、罪^{つみ}の赦^{ゆる}し、からだのよみがえり、としえの命^{いのち}を信^{しん}ず。アーメン。

献 金 (黒) 教会活動・(赤) 東部中会青年会修養会 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

(こひつじ科夏季プログラム)

聖書朗読 申命記10章14-18節(旧約 p.298)

コロサイ2章11-15節(新約 p.370)

説教・祈祷 「はつきりとした生き方」 杉山昌樹牧師

* 賛美歌 92:1, 2

1. 新しき歌もて 主をたたえまつれ。主は奇^くすしき業^{わざ}を成^なし遂^とげたまえり。主は救^{きう}いの業^{わざ}を力^{ちから}もて果^はたし、世界^{せかい}の国^{くに}々に勝^{かち}利^つを告^つげたまえり。

2. 主はみいつくしみとまこととをもちて、イスラエルの家^{いえ}を顧^{かへり}みたまえり、地^ちの果^はてまですべて 人^{ひと}々は見^みたり、わが神^{かみ}の救^{きう}いの大^{おほい}なる御^み業^{わざ}を。

* 主の祈り 祈祷書1

天^{てん}にましますわれ^{われ}の父^{ちち}よ

願^{ねが}わくは御^み名^なをあがめさせたまえ

御^み国^{くに}を来^きたらせたまえ 御^み心^{こころ}の天^{てん}になるごとく 地^ちにもなさせたまえ

われ^{われ}の日^{にち}用^{よう}の糧^{かて}を 今日^{けふ}も与^{あた}えたまえ

われ^{われ}に罪^{つみ}を犯^{おか}す者^{もの}をわれ^{われ}が赦^{ゆる}すごとく われ^{われ}の罪^{つみ}をも赦^{ゆる}したまえ

われ^{われ}を試^{こころ}みに会^あわせず 悪^{あく}より救^{すく}い出^{いだ}したまえ

国^{くに}と力^{ちから}と栄^{さか}えとは 限^{かぎ}りなく汝^{なんじ}のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 67

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、あみさかえよ。アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤兵庫長老 (司会・受付 次週：門脇献一長老)

本日 受付 1階：加藤良明・若月学執事 2階：森永美保執事 / ZOOMホスト・録音：門脇光生

次週 受付 1階：大日南隆夫・大日南信也執事 2階：藤井牧子執事 / ZOOMホスト・録音：大日南悠

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

コロサイ2：11-15「はっきりとした生き方」

本当のこと

今日の説教題は「はっきりとした生き方」としました。実は来週の説教題である「本物を見抜く」ということとも関係するのですが、私たちは、信仰生活を続けていくうちに、自分はどのような状態であるのか、自分は何なのか、について迷ってしまうことがあります。とりわけ、問題が生じたときなどに、これでいいのか、自分はいったい、というような思いにとらわれてしまうことがあります。今日の聖書においてパウロが語りたいのは、でも、あなたたちはもう、新しくされている、そこをしっかりと受け取ってほしい、そのような思いでこの手紙は書かれているのです。ですから今日は基本的に私たちがなんであるのか、その一点についてお話したいのですが、具体的には二つのこと、すなわち、割礼のこと、そして、もう一つは「証書」という言葉について、これは別々のことではないのですけれども、主に二つの言葉を手掛かりに考えたいのです。それでまずは11節の、「キリストの割礼」という言葉に注目します。これはそのままでは少しわかりにくい言葉かもしれませんが、しかし、その次の12節を見ますと、どうやら洗礼のことを言っているようだとわかります。問題はその洗礼で何が起きたのか、です。

新しい割礼

11節では「手によられない割礼」という言葉があります。これには前提として、アブラハムに与えられた割礼があります。男の子の赤ちゃんのおちんちんの先の皮を少しだけ切り取るというのが割礼ですが、それはアブラハムに与えられた契約のしるしでした。すなわち、神様がアブラハムたちの神様になってくれること、そしてアブラハムとその子孫は神様の民となること、民が増え広がること、約束の土地が与えられること、といった約束の決定的なしるしとして、割礼が位置づけられていました。一言で言えば、神様のものであるしるし、それが割礼です。ところが、コロサイの人たちは、以前は「肉において割礼を受けず、罪の中にいて死んでいた」と13節にあります。「罪の中にいて死んでいた」というのもっと端的に言いますと、神様と関係ないものだった、ということです。なんだ、それだけかと思われるでしょうか。

割礼、洗礼

しかし、この所の理解が意外と大切です。私たちは、人に対して、世間に対して、会社で、家庭で、何か悪いことをしてしまった、失敗した、といったことについてはかなり敏感です。いっぽうで神様についてはどうでしょうか。このあたり、本当に感覚的な話です。でも、神様に対してということをあまり感じないとしたらそれは、ただ、神様を意識していないだけ、無感覚なだけの状態ではないのです。むしろ、先ほど確認しましたように、何しろ神様がいませんから、いつでも気になるのは人間です。人間同士です。常に、自分はどこか悪いのではないか、世間は、あるいは、自分と関わっているこの人たちはどこかおかしいのではないか、というように自分と他人のあら捜しをしてばかりいる状態になってしまうかもしれません。そこで、ちょっと先ほどの割礼という言葉との関連で、申命記の言葉を紹介します。開きませんが、こんな言葉です。「心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになつてはならない。」（申命10：16）。先ほど最初の割礼のことをお話ししましたが、問題は心だということです。さらに言いますと、心のかたくなさなのです。わたしたちが、自分だけ、と思い、神様は関係ないと思い、他人も関係ないと思っている、その心のかたくなさ、その中で互いが、互いの悪いところを探り合っている、そのような状態をここでは死んでいた、と言いま罪に生きているというのです。しかし、今はイエス様と一緒に生きたものになったと続けます。何によってか、キリストの割礼によってです。11節に「つまり肉の体を脱ぎ捨てるキリストの割礼を受け」とあります。さらに、この「キリストの割礼」とは「洗礼」だ、と12節に続きます。

一緒に死んで生きる

そして11節で語られております「肉の体を脱ぎ捨てる」という、少々わかりにくい言い方の言わんとするところは、私たちの心のかたくなさが砕かれた、という意味です。それはどうやってかと言います

と12節で描かれている死と復活のことです。すなわち「洗礼によって、キリストと共に葬られ、」少し飛ばして「キリストと共に復活させられたのです」とありますとおりです。自分に頼って、ただ、ただ人間だけを見て、人間同士で、いい悪いを言い合い、闘っていたそのような生き方に死んで、神様の前で生きようになった、神様の前で生きたものとなった、神様の前で生きていると認められるものとなった、俺はここにいるぞ、と訴えれば神様がああ、わかっているよ、と言ってくれるものとなった、それがイエス様と一緒に復活の命に生きている、という意味です。それを言い換えたのが、先ほど飛ばした部分です。「キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて」。ここで特に大切なのは、「神の力を信じて」というところです。わたしたちがキリスト教徒である、というのはこの命の力を信じるのです。死に打ち勝つ力、イエス様を復活させ、そのイエス様を信じる者、即ち私たちをも、イエス様と一緒に生かす、これからも生かし続ける、その力を信じるということです。そして、続く証書という言葉によって、さらにこの事実を確認しているのです。

借金怖い

改めて14節を読んでみます。この「証書」という言葉ですが、この場合には、規則によって私たちを訴えて不利に陥れる、証拠書類というイメージです。おそらくこれはキリスト教信仰的には律法との関連が意識されているのだと思われます。律法に照らして、自分が正しいか間違っているか、というような見方です。しかし、それをここでは、借金の証文に譬えているのです。もう昔のことになりましたけれども、私の実家はかつてちょっとした事業をしておりました。幼いころ、金策に駆け回る両親の姿を見て何となく不安になったことをうっすらと覚えています。そのころから、借金は怖いもの、という意識が身に染みんでいます。あるいは箴言には借金についてずばりと言いあらわす言葉があります。「金持ちが貧乏な者を支配する。借りる者は貸す者の奴隷となる。」(箴言22:7)。借金があるとそれに支配されてしまうのです。パウロもまたローマ書で愛の義務以外、誰にも借りがあってはならないと言います(ローマ13:8)。もちろん、これは比喩的な表現です。問題は、わたしたちが何に支配されているのかです。まるで借金の証文を突きつけられたように、もうお手上げ、になってしまうもの、私たちを責めてくるものが、あるのではないか、パウロはどうもそういいたいようです。

誰が証書を造るのか

ところで一つ一緒に考えていただきたいことがあります。それは悪魔の働きについてです。このご時世に悪魔ですか、と思われるでしょうか。この科学知識がいきわたった時代にと言いたいところですが、けれども、悪魔の影響は今も私たちの心の中にあるのではないか、巧妙に心に語り掛けているのではないか、と私は考えています。しかもそれは、わたしたちが自分自身を見限る方向で働いているように感じられるのです。悪魔が最も喜ぶこと、それは、わたしたちが自分自身をダメだと思うこと、私たち仲間同士がお互いに信頼できなくなることです。一言で言えば教会を病にすることです。とりわけ、わたしたちが、自分は、ここがダメだ、こっちもダメだ、とても神様の前に立てるようなものではない、と自分の罪を、自らの足りないところを数え始め、ああ失敗だらけだ、何もできていない、と気に病んでしまうことには大きな罠があります。もちろん、正しい意味で反省、悔い改めが必要な場合があることは否定しません。しかし、これは私自身のことですけれども、ふと消えてしまいたい、死んでしまいたいという思いが心をよぎることが以前はたびたびありました。自分のダメさ加減ばかりが心を支配してしまうようになるということは、ある意味で、あの借金の証文を、せつせと自分で書き上げていることになりかねないのです。お前は、ここが失格、ここも失格、という証書を自分で自分にべたべた張り付けている、こんなイメージです。律法や、人間の知恵、ルール、道徳、といったもので、お前のここがダメ、ここもダメ、ほら、こんなに証拠がある、と言って自分を責めさいなむ、そんな証書が束になって私たちと神様の間に立ちはだかっているようなイメージです。けれども、イエス様はこの状況を完全に終わりにされた、というのが14節の結論です。「証書を破棄し、これを十字架にくぎ付けにして取り除いてくださいました」。

不正な管理人ーイエスの勝利

ルカによる福音書に不正な管理人のたとえ話があります。少し端折ってお話ししますが、長年

不正をしていたある家の管理人が、主人に不正を見つけられてしまった時に、借金のある人たちを呼び寄せて、君の証書はこれだね、よし、額を書き換えてしまいなさい、君のはこれか、君も額を少なく書き換えなさい、というようにして、仲間を作った、受け入れ先を造った、という少々不思議な話です。しかし、あの譬えでイエス様が伝えたかったのは、おそらく、使えるものは何でも使って、命を自分のものにしなさい、ということだと私は理解しています。どのような手を使っても、地上で自分を支配しようとしてくるものから逃れよ、これがイエス様の命令です。そして、先ほど読みました、このコロサイの2章14節では、そもそも、証書そのものを、イエス様が引き取ってしまっておられるというのです。神様の前から、私たちを責める証書をさっと取り上げて、十字架につけて、もうこれは無効、としてしまっているというのです。イエス様がご自身を十字架につけられ、すべての借金を、すなわち、罪をチャラにしまっているのです。もう、実はあなたを縛り付けるものは存在しない、これこそが現実だとパウロは言いたいのです。それだけではありません。この勝利はすでに決定的になっているということが続く15節で言われています。

支配と権威？

15節には「もろもろの支配と権威」という言葉があります。聖書には様々な意味で「支配」という言葉が使われます。例えば「死の支配」（ローマ5：14）ですとか「罪の支配」（同6：6）です。けれども今日の聖書の15節の最後を見ますと、さらし者にされる、とありますのでどちらかと言いますとこの「支配」はもう少し人格的な存在のこのようです。そこで例えば、今日の少し後20節を見ますと「世を支配する諸霊」という言葉が登場します。同じような表現はエフェソ書にもあります。「支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊」（エフェ6：12）。これはおそらく悪魔とその働きのことです。それが私たちに働きかけてくる、支配しようとする、というのです。おそらく、それは今も変わっていません。けれども、このように私たちを支配しようとする力、私たちを脅しつけようとする力、これらのものは皆、イエス様によって引きずり回されてしまっている、奴隷のようにされてしまっている、イエス様の勝利の行進の後ろを、みじめに引きずり回されてしまっている、だから、この事をあなたたちは良くよく理解しなければならない。この決定的な勝利がすでに私たちの物になっている、これがパウロが願っていることです。

本物を見抜く

わたしたちが、イエス様をこのような勝利された方として信じたときから、私たちもまた、キリストと共に勝利の行進に連なるものとなっているのです。私たちはすでに、死んだものでも、ダメなものでもなく、キリストと共に今も生きていますし、これからも生きていくものとなっているのです。なぜなら、私たちと、神様との間を隔てるあの証書はもう存在しないからです。こんな私は神様の前に出られない、とか、こんな私は人様の前に出られない、と心配する必要がすでにないのです。これが本当のことです。私たちはこの本当のこと、そしてそれを指し示す本物の信仰を見抜いて生きていくのです。

祈り

全能の父なる神様。あなたはキリストによって、その十字架において、私たちの何重にも重なる罪の記録を釘づけにして、葬り去ってくださいましたから感謝します。また、私たちを、キリストの勝利の戦列に連なるものとしてくださいました。わたしたちが、どれほど困難な時にあっても、このキリストの勝利を見つめ、そのみ跡に従い、悪魔に惑わされることなく、正しく歩むことができますように。いや、すでにその道が開かれておりますから、ますますその道を確認できますようにお導き下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。